

國學院大學學術情報リポジトリ

魔法と変身：「魔法少女」形成期における「魔法」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井, 研士 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000831

魔法と変身

―「魔法少女」形成期における「魔法」―

石井 研 士

キーワード

魔法 魔法少女 変身 魔法使いサリー ひみつのアッコちゃん

はじめに―「変身」の現代的様相

本論は、「魔法」と「変身」をキーワードとして、現代日本社会のポップカルチャーに表象される宗教性について考察する。

変身であるが、変身願望は、現代日本社会において、多様な形態を取りながら、いたるところにうかがうことができる。新聞記事で「変身」「変身願望」を検索すると、実に多くの記事に行き当たる。私たちがいかに外形を変えることで、何か別の物、別の自分になりたがっているか、具体的に理解することができる。エステやダイエットによる瘦身願望は、変身願望ときわめて近い関係にあるように思える。筋肉を付けるボディメイクや、果ては整形にいたっては変身そのものである。タトゥーやスプリットタン（舌を割る）、身体に異物を埋めこんだり穴をあけるなどの身体改造も同様と考えていいだろう。

新聞記事でヒットする多くは、化粧や服飾に関するものである。ウィッグ、カラーコンタクト、メーキャップ、男装・女装、そしてコスプレなどは、比較的簡単な「変身」である。

田中東子によれば、少女系サブカルチャーにおいても主流ではなかったコスプレが、一気に広がりを見せるのは1990年代半ば以降である。^① コスプレとは「既存のキャラクターに似た衣装や化粧や装具を身につけ、そのキャラになりきって決めのポーズを取ったり、踊ったり、写真のモデルになったりする仮装遊び^②」である。化粧や服装を日常とは極端に変えることで、「別人になったみたい」「イメージチェンジがしたかった」「いつもと違う自分」ということなのかもしれないが、こうした変身にはどこか宗教性がまといっているように思えてならない。^③

平成11年8月、メディアでは「ヤマンバ」が社会現象として話題となった。ヤマンバは渋谷のギャル系ファッションで、顔は日焼け以上黒く、髪を白・金・銀色などに染めてメッシュを入れる、髪をバサバサにする、唇を白く塗る、目元はバンダのようでラメ化粧やパールメイク、ポリウムのあるつけまつ毛をする、という化粧をしてしまえば本人とは認識できないファッションである。「ヤマンバ」は山奥に住み旅人を喰うとされる妖怪である。化粧をしている女性自らが名乗ったわけではない。彼女らにとっては、小麦色の肌、ガンダロの延長線上にあった渋谷カジュアルである。^④

平成二八年の渋谷でのハロウィンではテレビを初めとした多くのメディアで取り上げられ注目を集めることになった。前年の渋谷でのハロウィンに、仮装をした多くの若者が集まり、予想をはるかに超える賑わいというか、騒動にまでいたったからである。渋谷のハロウィンが一気に盛り上がったのは前年の平成二七年のことだった。ハロウィンのイベントは以前から川崎市や六本木、あるいはデイズニールンで行われてきたが、渋谷で盛り上がりを見せることはなかった。しかしながら徐々に整いつつあった渋谷ハロウィンは、突然爆発することになった。警察は想像以上の混乱に急遽二〇〇名の警官を動員したのであった。^⑤

主人公や人気のキャラクターへの変身は、近年、コミックマーケットといった、空間的に限定された、おそらくはかに参加人数が多いといえ限定された空間から都市空間一般へ、一部のファンから非特定の人々へと広がつつある。

本論で扱うのは、現代日本社会における「変身」「変身願望」全般ではない。本論が扱うのは、アニメ、マンガが中心で、それら作品に色濃く「変身」に関わるジャンルが存在するからである。宗教においては、変身は重要な概念である。宗教に関する用語の代表的な辞

典である『宗教学辞典』（東京大学出版会、昭和48年）には「化身」が、『宗教学事典』（丸善、平成22年）には「身体偽装・異装」が設けられている。日本の辞典だけでなく*The Encyclopedia of Religion* (Macmillan Publishing Company, 1987) には「shape shifting」が項目として立てられている。「変身 (shape-shifting) とは、意のままに身体の形を変える能力のことである。その特徴は神々、精霊、宗教的職能者（たとえばシャーマン）に共通する。」(Smith, Jonathan A. ed. *The Harper-Collins Dictionary of Religion*, Harper-Collins) たんに髪型を変えるとか、服装が替わるとか以上に、さまざまな儀礼の場面において、神になる、鬼神になる、仏になる、など人格的変換を遂げる場合がある。特別な宗教者ではなくても、成年式や結婚式など、通過儀礼の際には、子どもとして死んで大人として生まれ変わるとか、別の者になることが強調される。

そうした現象がアニメ・マンガにおいても認められるのである。とくに顕著なのが、「魔法少女（魔女っ子、あるいは魔女っ娘とも表現される）」と呼ばれるジャンルと、「ロボット」である。魔法少女に関しては、「魔法」が付されているように、宗教学的に扱うことは可能だという推測は働くだろう。しかしながらロボットを主人公にしたアニメやマンガに宗教性が見られるという前提はそう簡単ではなさそうである。

アニメ・特撮研究家で明治大学大学院国際日本学研究科客員教授も勤める氷川竜介は、現在に至るまでのロボットアニメの主流が、人型サイズのアトムではなく、巨大ロボットであることを指摘している。さらに、巨大ロボットであっても、鉄人28号のような外からの操縦タイプではないロボット・アニメこそが多くの視聴者を獲得してきたと述べている。

たしかに、鉄人28号も巨大なロボットではあります。しかし、主人公の少年や少女が乗り込むことは、物語においてそれまでとは全く異なる要素をもたらしました。…ロボットアニメは『ウルトラマン』や『仮面ライダー』の変身ヒーローものの派生形であり、リアルな進化形だと思えます。本場に「人の形が変わってしまう」ということはあり得ないけれど、「ロボットに乗って操縦する」ような形なら、まだあり得る。自分にもできるかもしれないというリアリズムの感覚を子どもは持っているし、重視しているということ。そしてこの「疑似変身」に相当するプロセスというか作品にはいるための手続きが、合体とか変形と言われているギミックという位置付けなんです⁽⁶⁾ね。



巨大ロボット系のアニメを「変身」のテーマから扱うことは、氷川の言動からも十分に可能であるように思える。

ここでいう「変身」は「成長」とは異なった状況を指し示すものである。アニメやマンガでは、主人公が周囲の助力を得て、困難な状況下で成長していく物語が少なくない。「成長」をテーマにしたマンガ・アニメは、読者の年代の問題もあって、恋愛物やギャグマンガなどほとんどの作品に含まれているといっているのではないか。たとえば、スポーツをテーマにしたものの大半は試合や闘いを通して主人公が成長していく。最近では、アイドルになるための活動を通して（「ラブライブ！」）、学校を存続させるための戦車道によって（「ガールズ&パンツァー」）など、いくらかでも列挙することが可能である。

「成長」もまた、不斷の努力によって継続し連続して成長していくのではなく、どこかでそれまでとは格段に異なる飛躍が生じることがあるだろう。しかしながら宗教的な「変身」は、継続よりは断絶に力点と意味が置かれているのである。

魔法少女のはじまり

先に記したように、アニメ・マンガには「魔法少女」と言われるジャンルがある。魔法少女の歴史はかなり具体的に分かっている。日本で最初の少女向けアニメは横山光輝原作の「魔法使いサリー」である。⁽⁷⁾

一般的に、魔法使いサリーはテレビ放送のアニメとして知られているが、アニメに先だってマンガが月刊の集英社の少女雑誌『りぼん』（昭和41年7月号・昭和42年10月号）に掲載されている。掲載が開始されて漫画間もない11月号に、テレビでの放送開始が予告されている。テレビでの初回放送は昭和41年12月5日であるから（終了は昭和43年12月30日、全109話）、テレビ放送での制作期間を考慮すると、テレビでの放送は連載してまもなく決定したことになる。

連載と放送が並行していたこともあるが、テレビの放送内容には、横山光輝の原作とは主人公の名前（マンガでは当初は「サニー」）

やストーリー、世界観をはじめ、さまざまな点で変更が確認できる。アニメの「魔法使いサリー」はテレビで放送することを前提にして、マンガを改変したと考えられる。

制作会社の東映動画は「魔法使いサリー」がヒットしたことで、魔女っ子シリーズとして、「ひみつのアッコちゃん」「魔法のマコちゃん」「さるとびエッチちゃん」「魔法使いチャッピー」などの作品を作り続けた。他社も追随し、「魔法の天使クリイミーマミ」「魔法の妖精ペルシャ」「カードキャプターさくら」「魔法少女まどか☆マギカ」などの後継作品作り続け今日にいたっている。

魔法少女について書かれた複数の文献、ネット上の情報（作成に当たっては、Wikipedia「魔法少女アニメ一覧」を参照している）を参考にして一覧を作成すると次のようになる。一覧は、網羅的を目的にしたものではなく、一般的に「魔法少女」というジャンルで括られる作品を示すために作成した。



図表1 魔法少女一覧

放送開始年	作 品 名	制作会社
1966	魔法使いサリー	東映動画
1969	ひみつのアッコちゃん	東映動画
1970	魔法のマコちゃん	東映動画
1971	さるとびエッちゃん	東映動画
1972	魔法使いチャッピー	東映動画
1973	ミラクル少女リミットちゃん	東映動画
1973	キューティーハニー	東映
1974	魔女っ子メグちゃん	東映動画
1978	魔女っ子チックル	東映
1979	花の子ルンルン	東映動画
1980	魔法少女ララベル	東映動画
1982	魔法のプリンセス ミンキーモモ	葦プロダクション
1983	魔法の天使クリィミーマミ	スタジオぴえろ
1984	魔法の妖精ペルシャ	スタジオぴえろ
1985	魔法のスター マジカルエミ	スタジオぴえろ
1986	魔法のアイドル パステルユーミ	スタジオぴえろ
1987	エスパー魔美	シンエイ動画
1988	ひみつのアッコちゃん	東映動画
1989	魔法使いサリー	東映動画
1990	魔法のエンジェル スイートミント	葦プロダクション
1991	魔法のプリンセス ミンキーモモ 夢を抱きしめて	葦プロダクション
1992	花の魔法使いマリーベル	葦プロダクション
1992	美少女戦士セーラームーンシリーズ	東映動画
1992	ヤダモン	グループ・タック
1992	姫ちゃんのリボン	スタジオぎゃろっぷ
1993	ミラクル☆ガールズ	ASATSU／ジャパンタップス
1994	赤ずきんチャチャ	スタジオぎゃろっぷ
1994	愛と勇気のビッグガール とんでぶーりん	ASATSU／日本アニメーション
1994	魔法騎士レイアース	東京ムービー
1995	愛天使伝説ウェディングピーチ	ケイエスエス
1995	ナースエンジェルりりかSOS	スタジオぎゃろっぷ
1995	怪盗セイント・テール	東京ムービー
1996	魔法使いTail	トライアングルスタッフ
1996	魔法少女プリティサミー	AIC
1998	ふしぎ魔法ファンファンファーマシー	東映アニメーション
1998	ひみつのアッコちゃん	東映アニメーション
1998	カードキャプターさくら	マッドハウス
1998	魔法のステージ ファンシーララ	スタジオぴえろ
1999	おジャ魔女どれみシリーズ	東映アニメーション
1999	神風怪盗ジャンヌ	東映アニメーション
1999	コレクター・ユイ	日本アニメーション／NHKエンタープライズ21
2000	Cardcaptors	マッドハウス
2001	Cosmic Baton Girl コメットさん☆	日本アニメーション／シナジージャパン
2002	満月をさがして	スタジオディーン
2002	ナースウィッチ小麦ちゃんマジカルて	タツノコプロ／京都アニメーション
2002	プリンセスチュチュ	ハルフィルムメーカー
2003	マーメイドメロディぴちぴちピッチシリーズ	アクタス

放送開始年	作 品 名	制作会社
2003	ウルトラマニアック	葦プロダクション
2004	ふたりはプリキュア／ふたりはプリキュア Max Heart	東映アニメーション
2004	魔法少女隊アルス	STUDIO 4℃
2004	魔法少女リリカルなのはシリーズ	セブン・アークス
2004	ウィッチ -W.I.T.C.H.-	シップ・アニメーション
2004	Winx Club	レインボーS.r.l.
2005	撲殺天使ドクロちゃん	ハルフィルムメーカー
2005	ふしぎ星の☆ふたご姫	バースデイ
2005	シュガシュガルー	studioぴえろ
2005	まじかるカナ	AIC ASTA
2005	奥さまは魔法少女	J.C.STAFF
2005	魔女っ娘つくねちゃん	XEBEC
2006	ふたりはプリキュア Splash Star	東映アニメーション
2006	大魔法峠	スタジオバルセロナ
2006	砂沙美☆魔法少女クラブ	AIC
2006	出ましたっ!パワパフガールズZ	東映アニメーション
2007	Yes!プリキュア5／Yes!プリキュア5GoGo!	東映アニメーション
2007	オシャレ魔女 ラブandベリー しあわせのまほう	トムス・エンタテインメント
2007	かみちやまかりん	サテライト
2007	もえたん	アクタス
2007	しゅごキャラ!シリーズ	サテライト
2008	ストライクウィッチーズシリーズ	GONZO→AIC→SILVER LINK.
2009	フレッシュプリキュア!	東映アニメーション
2009	ジュエルペットシリーズ	スタジオコメット
2009	あにゃまる探偵 キルミンずう	サテライト／JM ANIMATION
2010	ハートキャッチプリキュア!	東映アニメーション
2010	ひめチェン!おとぎちっくアイドル リルぷりっ	テレコム・アニメーションフィルム
2011	魔法少女まどか☆マギカ	シャフト
2011	スイートプリキュア♪	東映アニメーション
2011	快盗天使ツインエンジェル〜キュンキュン☆ときめきパラダイス!!〜	J.C.STAFF
2011	放課後のプレアデス	GAINAX
2012	スマイルプリキュア!	東映アニメーション
2012	黒魔女さんが通る!!	シンエイ動画
2013	ドキドキ!プリキュア	東映アニメーション
2013	Fate/kaleid liner プリズマ☆イリヤシリーズ	SILVER LINK.
2014	ハピネスチャージプリキュア!	東映アニメーション
2014	まじもじるるも	J.C.STAFF
2014	ウィッチクラフトワークス	J.C.STAFF
2015	Go!プリンセスプリキュア	東映アニメーション
2016	魔法つかいプリキュア!	東映アニメーション
2016	ふらいんぐういっち	J.C.STAFF
2016	魔法少女?なりあ☆がーるず	バウンズィ
2016	装神少女まとい	WHITE FOX
2017	キラキラ☆プリキュアアラモード	東映アニメーション

アニメ・マンガには「魔法少女」と言われるジャンルがある、と記したが、この領域では文学のようにジャンルに関する研究の積み重ねがあるわけではなさそうである。須川亜紀子は「少女が魔法を駆使して大活躍する『魔法少女』アニメジャンル」といい、登丸あすかは「魔法少女アニメ番組は、1960年代からこれまで、さまざまな設定とストーリーで放映されてきた。1つのジャンルとして成立していると言えるだろう」と述べているが、魔法少女というジャンルがどのようなものかはリストの提示のみに終わっている。

日本のアニメの全体像を扱った著作においても、ジャンルに関する考察や分類が明示されることはほとんどない。言及が見られる場合でも、「アニメのジャンルは、SF、スポーツ、ファミリー、アクション、冒険、ファンタジーなど多岐に渡る」と表記され、文学作品や映画などで用いられている分類をそのまま援用しているように思える。⁽¹¹⁾ アニメ・マンガが研究対象となる場合には、多くの場合、ジャンルが意識されるよりも、「宮崎アニメ」「宇宙戦艦ヤマト」「機動戦士ガンダム」「新世紀エヴァンゲリオン」といったように、個別の作品や監督が念頭に置かれているようである。

魔法や魔術とテーマが重なる幻想文学というジャンルを構造主義的アプローチから解明しようとしたトドロフは、現実とこれに隣接する超自然の領域の関係を明確にすることで理念モデルとしての幻想文学を構築してゆく。『幻想文学論序説』（東京創元社、平成11年）では、ジャンルに関してかなり入念な考察が繰り返されている。⁽¹²⁾

私がここで論じているのは、文学と異なってマンガ・アニメにおけるジャンルに関する考察が不十分であるとか、明確にジャンルが規定されていないにも関わらずひとつのジャンルとして複数の作品を論じること自体に意味があるのかといったことではない。すでに「魔法少女」は私たちの間で十二分に認知され、そのジャンルを前提にして新たな作品が制作、流通、試聴（消費）、論評されているのである。

先にも指摘したように、こうした一般的な状況の中で、「ジャンル」が強く意識されるものに「ロボット」と「魔法少女」がある。先に引用した氷川竜介の文章の続きは次のようになっていいる。「中でも常に一定の支持率を得ているジャンルが「ロボット」と「魔法少女」だ。この2ジャンルが日本のアニメを常に牽引し、支えてきたのは事実である。…日本だけに存在する特異な世界である」⁽¹³⁾

ここで言う「美少女」はキャラクターとしてさらに四分類されているが、一大勢力は「変身系美少女」である。変身系美少女の事例として取り上げられている作品の大半は魔法少女である。⁽¹⁴⁾

「魔法少女」というジャンルが一般的に認知されているとしたら、それはどのようなジャンルで他の隣接領域とどのように異なっているのだろうか。現代における一般的な意味をWikipediaに依拠すると、「作中において魔法などの不思議な力を使い、騒動を巻き起こしたり事件を解決したりする少女をさすキャラクター類型（ストックキャラクター）である。魔法っ子ないしは魔法っ娘ともいう」と記されている。先に引用した須川亜紀の定義「魔法少女とは、一般的に、「魔法を使う少女」のことである」⁽¹⁵⁾と変わらない。

一見明快な定義のように思えるが、想定される作品を念頭に置いて考察すると、定義の微妙さが問題となる。実際の作品では、不思議な力の源泉が「魔法」といえるのかどうかわからないものが少なくない。魔法を使う女性であれば「魔法」になるが、具体的な絵柄といっても西洋の伝統的な魔女とはほど遠い。また、マンガやアニメでは「巫女」は不思議な能力を持つ人物として登場するが、「魔法少女」というジャンルには含まれないのが一般的である。『涼宮ハルヒの憂鬱』で涼宮ハルヒは自覚しないままに不思議な力を発揮しており、それがストーリーの中核をなしているにもかかわらず、「魔法少女」には分類されない。

さらに奇妙なのは、呪いや恐怖をモチーフにしたマンガやアニメもこのジャンルからは排除されている。たとえば、アニメにこそなかったが、実写が話題になった「エコエコアザラク」⁽¹⁶⁾「地獄少女」⁽¹⁷⁾「富江」⁽¹⁸⁾を挙げることができる。また、「魔法少女」を扱う論者は、アニメに限定しがちで、マンガは概ね無視する傾向にある。なぜ考察をアニメに限定するのか、その理由も明確ではない。

魔法少女には、西洋の魔女からの連想や、そうした魔女が登場する映画や絵本の影響が指摘される。日本人が魔法や魔女に関する基本的な知識を有しているとは思えない。他方で、なんとなくイメージされるものはあるようだ。箒に乗ったり、黒い衣装をまとい、黒い三角帽子をかぶる、杖で不思議な行為をする、などがそうであろうが、実際にそうした姿で現れる「魔法少女」はわずかである。作品のあまりの多様さにとまどうことになる。

魔法使いサリーが魔法少女というジャンルの最初作品であるとしたら、この作品がどのようにして構想されたのかを見ておくことは、後の考察のための出発点になるだろう。

なぜ「魔法使い」サリーだったのか

魔法少女アニメの嚆矢が魔法使いサリーであるとして、なぜサリーは「魔法使い」だったのだろうか。少女向けのアニメが受けないこ

とを理由に敬遠されていた時期に、なぜサリーは「魔法使い」として登場したのだろうか。

魔法使いサリーが生まれるきっかけは、これまで明らかになっている限りでは、「奥さまは魔女」、ジョン・バツカン『魔法のつえ』、そして「お化けのQ太郎」の三つである。

原作者の横山光輝は次のような文章を残している。

連載期間が短かったのは、あの頃、作品をたくさん書いてましたから多忙だったのと、アニメでやるならこちらはそのままで書く必要はないんじゃないかという気がして途中でやめた作品なんです。まあ、この作品は童話の世界にある魔法使いの悪魔的イメージから、『奥さまは魔女』のような明るいイメージという、魔女を別のとらえ方でマングとして楽しく書けるんじゃないかと感じて書いたのが、成功したのでしょうか。⁽¹⁹⁾



アニメの「魔法使いサリー」は東映動画によって作成されたが、アニメにすることを思い立ったのは、当時、東映本社のプロデューサーだった渡辺亮徳である。横山のマンガの連載予告を見た渡辺は、ただちに電話をして「ぼくがテレビにするから、よそにやっちゃダメだよ」といったという。⁽²⁰⁾ 渡辺はアニメが男の子向け活劇であつたのに対してもっと女の子が喜ぶものを作れないかと考えていたという。「たまたまこの年、米国のコメディ「奥さまは魔女」が人気にもなっていた。そこで目にした横山のサリーの絵。「かわいい魔女、これは当たる」と直感した。⁽²¹⁾

「奥さまは魔女 (Bewitched)」

マンガの連載に先立つ半年ほど前の昭和41年2月1日から「奥さまは魔女」というアメリカのホームコメディ番組がTBS系列で放映された。番組は大ヒットしたといわれ、その後のテレビ番組に少なくない影響をもたらした。

「奥さまは魔女 (Bewitched)」は昭和39年から47年までアメリカのABC放送で放送されたコメディドラマである。ABCネットワーク



ク創設いらいの大ヒットを記録した⁽²²⁾。アメリカでの第一シーズンの視聴率は31パーセント、8年間の平均視聴率は22・6パーセントと高く、エミー賞を始め多くの賞を獲得している⁽²³⁾。

日本での放送の冒頭にはナレーションがつけられていた。これは日本のオリジナルで、「でもただ一つ違っていたのは、奥さまは魔女だったのです」というフレーズは、主人公のサマンサが口と鼻をぴくぴくと動かして魔法をかける動作とともに、一躍人気となった。日本での放送時間は毎週火曜日の21時30分から30分間という、子どもが見る番組としては遅い時間帯であった。宮崎慎一は、遅い時間帯にもかかわらず子どもが試聴している実態を把握して放送がうまくいくことを確認していたと述べている⁽²⁴⁾。

タイトルバックに黒の三角帽子と黒い服、黒のマントを羽織ってほうきに乗るサマンサが描かれているが、実際の放送ではこうした姿で登場したことは一度しかない⁽²⁵⁾。サマンサは当時のアメリカの普通の主婦として登場する。

第一回放送で、結婚した後サマンサはダーリンに、自分は魔女であることを打ち明ける。冗談と思って信じないダーリンに、サマンサはライターの火を点ける、灰皿を動かす、皿を動かして肘を皿に入れる、といったいたずらに近い魔法を見せて信じさせる。二人の間で、魔法を使わず普通の家庭を築くことが約束される。もともとサマンサは、ダーリンが見ていないときには都合良く、料理を作ったり後片付けをしたりと、「魔法」を使うことにさほど躊躇を見せない。

『魔法のつえ』

先に引用した横山光輝の「あとがき」には、もうひとつ創作の源泉となったものが挙げられている。ジョン・バックンの『魔法のつえ』である。横山は「今まで読んだ本の中に、『魔法のつえ』という小説があつて杖をまわすと自分の思う所へいけちゃうという、それがヒントになったんですがね⁽²⁶⁾」と述べている。

『魔法のつえ』(*The Magic Walking Stick*)はスコットランド人のジョン・バックン (John Buchan) が昭和7年に刊行した児童小説である。日本での初訳は昭和26年で講談社より刊行された。『お化けのQ太郎』や『忍者ハットリくん』を書いた藤子不二雄^(A)は、復刻された『魔法のつえ』(株式会社復刊ドットコム、平成25年)の巻末に「『魔法のつえ』の思い出」を寄せている。藤子不二雄^(A)によると、

藤子・F・不二雄の少年時代の愛読書が『魔法のつえ』であったという。藤子不二雄^①は、後年、藤子・F・不二雄が『ドラえもん』を描いたときには「この『魔法のつえ』のアイディアがあったと思うんです^②」と述べている。

『魔法のつえ』は、あやしげな老人から偶然に魔法のつえをもらった少年の物語である。杖の取っ手をぐるぐるまわしながら行きたい場所を念じると瞬時に移動することができる。最初は移動を楽しんでいた主人公のビルは、飛行機で遭難した叔父を助け、さらにはグノーシャ国の内乱にかかわって王子を助け国を平和に導く……、というストーリーになっている。

『魔法のつえ』は教訓色の強い物語である。使う人の心が正しくないと杖は怒って消えてなくなるといわれる。ふとしたことで杖が自分から離れることになったビルは、何もかも杖の力であるのに自分の力と思いついていたので杖は謙遜の心を教えるために自分の元を去ったのだと考える。「つえがおしえてくれた、さとしをわすれずに、これからけんそんに、まじめに、べんきょうしていこう」（173頁）というのが物語の最後となっている。

「お化けのQ太郎」

今ひとつ、別の原因をメディアとジェンダー研究者の須川亜紀子は、東映動画の魔法使いサリーの企画書（未刊行物）から、次のように指摘している。

東映動画の企画書によると、先行していたアニメ『お化けのQ太郎』（昭和40～42年）の成功が、『サリー』誕生のひとつのヒントとなったようである。超能力を持つ主人公（Q太郎）が日常生活の中に登場する点で、「スーパーマン、忍者ものと大きな違い」が魅力となったため、魔女の主人公サリーは、日常生活の中で超能力を持つ「やさしい心を持ったお茶目な少女」として企図されたのだ^③。

「お化けのQ太郎」は、藤子不二雄原作によるギャグマンガである卵から生まれたQ太郎は大原家の居候になる。お人好しで大食らい、犬が苦手はQ太郎はさまざまな騒動を巻き起こしていく。Q太郎は空を飛び姿を消すことができる。

テレビの視聴率は30パーセントを超え、主題歌の入ったシングルレコードの売り上げが60万枚を超える大ヒットとなり、「日本中に空



前の大ブームを巻き起こした⁽³⁰⁾。

本論は「変身」をテーマにしている。そのジャンルとして「魔法少女」「ロボットもの」を指定したが、最初の魔法少女アニメといわれる「魔法使いサリー」は変身しない。そもそも「奥さまは魔女」は魔法は使うが、実写では変身しない。「お化けのQ太郎」もまた、空を飛び、透明になって壁を通り抜けたりするが、変身することはない。『魔法の杖』の主人公も、自由に移動しこそすれ、変身はできない。魔法使いサリーを生み出した要因の中には、「変身」は含まれていない。

「魔法少女」が「魔法使いサリー」から始まるとされるのであれば、作品において魔法がどのように表現されているのか、西洋由来の「魔法使い」はどのように表象されているかを確認することは、今日まで営々と継承されているとされる「魔法少女」を考察する上で、避けて通ることのできない作業である。

「魔法使いサリー」の魔法

「魔法使いサリー」は、制作を担当した東映アニメーションの公式サイトで次のように紹介されている。

お転婆でいたずら好きな魔法使いの女の子・サリーが、ある日人間の世界に遊びにやって来ました。アドバールンにひかれてデパートにやって来たサリーは、同じ年頃の女の子、すみれちゃんとよしちゃんを見つけ、友達になりたいと思います。二人と親友になったサリーはすっかり人間の世界を気に入って、弟分のカブと二人で人間のふりをして、この町で暮らしていくことに決めたのです。そして、人間の生活を通して魔法よりも大切なものを知っていくのです。(http://www.toei-anim.co.jp/lineup/tv/sally/) (傍点筆者)

「魔法使い」というイメージ

本論の冒頭で述べたように、アニメの一連のグループは「魔法少女」「魔女っ娘(子)」として把握されている。「魔法」「魔女」は作品を貫くキーコンセプトであるが、実際には「魔法」と「少女」の組み合わせである。

魔法使いサリーにおいて、「魔法」はどのように表象されているのだろうか。日本人が「魔女」「魔法」「魔法使い」について具体的な詳細な知識や情報を有しているとは考えにくい。いくつかの断片的なイメージや情報から成り立っているのではないか。

先に指摘したように、制作の際に「奥さまは魔女」が原作の横山光輝とアニメの製作者の側に強く念頭に置かれていたことは明かである。奥さまは魔女の冒頭のシーン、箒に乗ってサマンサが登場する様子は、そのまま魔法使いサリーに引き継がれている。

毎回繰り返されるオープニングは、十分に「魔法使い」を意識したものである。冒頭でサリーは短い杖を持っている。杖の先から光の粉のようなものが現れ、古い木株を包むと、木株は洋館へと変わっていく。視聴者は、サリーが魔法を発動したために洋館が建ったと理解することになる。サリーの服装はいつもの服装で、「魔女」を表象するようなものは、「杖」以外にはみられない。⁽³¹⁾毎回繰り返されるオープニング主題歌では、サリーが何者で何をするかが端的に説明されている。視聴者は、説明付きでオープニングの映像を見ているわけである。

〈オープニング映像〉

古い木株から洋館を建てる

ネズミが踏んだ香水瓶からパンチが出る

ネズミが怒って投げる香水瓶等を消す

ネズミが持ち上げたブラシをネコに変える

ネズミを追いかけるネコをブラシに戻す

ネズミを追いかけるブラシを消す

箒に乗って空を飛ぶ

〈オープニング主題歌・歌詞〉

マハリクマハリタ ヤンバラヤンヤンヤン

マハリクマハリタ ヤンバラヤンヤンヤン

魔法の国からやって来た ちょっとチャームな女の子

サリーサリー

不思議な力で町中に 夢と笑いをふりまくの

サリーサリー魔法使いサリー

ほうきに乗ってやって来た ちょっとおちゃめなお姫さま

サリーサリー

魔法の言葉をとなえと 愛と希望がとび出すの

サリーサリー魔法使いサリー

サリーサリーサリーサリーちゃん

肝心の魔法であるが、作品ではどのような場面でのように表現されているのだろうか。また、作品で示される魔法はどの程度視聴者に面白がられ（影響を受け）、憧れを与えるのだろうか。そもそもテレビで見ただけで、影響があるのかどうか、さまざまな疑問が生じるが、まずはどのように表現されているのかを具体的に見ることにしたい。そのために、第1話から最終回の第109話まで使用される魔法についてメモを作成した。長大な量になるので、ここでは数話分の掲載にとどめる。恣意的にならないために区切りのいい第50話と100話を掲載する。

図表2 魔法一覧（第50話・第100話）

第50話 まごごろのかけ橋	
サリー	カブの頭の卵焼き冷やすためにお風呂をだす
カブ	ピクニックのお弁当を作る
サリー	引かれそうになった犬を助けるために車を止める
サリー	犬が言葉を喋るようにする
カブ	カラスに化ける
サリー	カブをカラスから元に戻す
サリー	犬が言葉を喋るようにする
サリー	道路に歩道橋を作る
父親	サリーが作った歩道橋を消す
よし子の父親が運転する車が原因でノイローゼになる。すみれは車が怖くて道が渡れなくなる。歩道橋ができれば問題が解決すると思ったサリーは役所に相談しに行くがうまくいかない。父親から魔法で作ってはいけないと諭されたサリーは運動を起こしてついに歩道橋を作ることに成功する。	

第100話 ほらふき和尚さん	
ポロン	三つ子がお寺の鐘を突こうとするのを悪戯で動かす
カブ	天狗を誘い出すために変装する
ポロン	天狗の鼻を低くする
カブ	天狗の鼻を長くする
ポロン	天狗の鼻を小さくする
カブ	天狗の下駄を長くする
ポロン	天狗の下駄を短くする
カブ	天狗を飛ばす
サリー	簪に乗って飛んでいく
サリー	天狗の前に現れる
サリー	天狗の縄をほどく
サリー	木の上に移動する
サリー	団扇でカブを飛ばす
サイクリングへ出かけたサリー達は、すみれの知り合いの和尚さんを訪ねる。和尚さんからひょうたん山には天狗が住んでいるという話を聞いた三ッ子は、好奇心からその山へと向か。天狗の正体は和尚さんで、子どもを危険な山に近づけないために天狗に化けていた。	

サリーやカブの魔法の使用に関しては、原則が設けられている。それは「魔法使いであることが知られたら魔法の国へ戻る」というものである。それゆえに、サリーやカブが魔法を使っているところを見られることは致命的な出来事であり、サリーやカブはそのことを十分に承知している。（「私たちの魔法のことがわかったら人間の世界にいられないわ」（54話））一方で、作品自体は「魔法」を売り物にしているものであり、こうした原則は時に容易に反故にされる。

ところで、なぜ魔法使いであることが人間に知られたら魔法の国へ戻らなければいけないのか、その理由は明確にされない。魔法や魔法使いの存在自体を知られることが問題であるかという点、そうではなさそうである。

最終回で、魔法の国へ戻ることになったサリーは、先生や友達の前で火災で燃えている校舎を魔法で（雨を降らせることで）消火する。サリーが魔法使いであることを知った友だちはサリーから一時的に離れていくが、いよいよ魔法の国へ帰る時に、「サリーちゃん

はサリーちゃんよ」「ちょっと驚いただけ」といつて別れを惜しむ。サリーが魔法使いであることを知っている者は他にも少なからず存在し、存在が知られたこと自体でこの世界のバランスや未来に変更が生じる、といったことは想定されていない。

つまり、魔法使いからすれば、人間と魔法使いはいっしょに生活できない（すべきではない、魔法使いの方が優越している）という不文律の決まりがあつて（人間の側からすればそのような者は存在しない）、人間の世界に興味を持ったサリーが禁を犯しているという状態で、物語が進行していることになる。

魔法が行使される場面は、大まかに言つて三種類である。第一に日常、第二に悪戯、そして第三に救済（人助け、そのための懲罰）である。

サリー、カブ、ポロンはきわめてふつうに魔法を使役する。「ふつう」というのは、魔法の国ではこれが当たり前、という意味である。「何でも魔法で解決しようとしてはダメ」（37話）、「できるだけ魔法は使わないようにしている」（41話）とサリーは繰り返すが、料理を作る、着替える、移動する（箒に乗る、壁やドアを通り抜ける、カブはカラスになつて空を飛ぶ）、消える（現れる）など、視聴者が望むような魔法は惜しげなく使われる。

サリーやカブは朝食や夕食、お菓子など調理することなく魔法で用意する。杖も持たずに指を振つたりウインクするだけで、テーブルに夕食やお茶が用意されるのである。時には、冷蔵庫から勝手に食材が出てきて、調理され、ふわふわと飛んでいく、といった場面も描かれる。



サリーは学校の登下校など、友だちといっしょの時は歩いたり電車に乗ったりと普通の小学生である。しかし、一旦急を要するときには躊躇せず箒にまたがつて空を飛ぶ。学校など外との行き来に際して玄関ドアを開けずに通り抜けることもする。カブはもっぱらカラスの姿で空を飛んで移動する。完全にカラスになるわけではなく、明らかに本人とわかる顔にくちばしが付けられている。カブはカラスになつて飛んでいき、木や屋根に停まってサリーや三つ子を見ている。動かずに物を取る、動かすなどもふつうに行う。

第99話「サリーのかぐや姫」では、建前上自制的であつたサリーが、「思いっきり使ってみましょうか」と、サブとともに箒に乗つて空を飛ぶ。場面はエンディングに近い部分で、構成上の問題で時間を埋めるためであるかもしれないが、魔法を

使うことの楽しさが伝えられるようになっていく。同じくカブも、「魔法とはこうも便利なものである」といっては舞台の大道具を制作する。



魔法が行使される第二のパターンは、「いたずら」である。視聴者を引きつけておくためにも、また話を進行させる上でも、魔法を使つたいたずらは重要なファクターである。全話を見てもまずわかることは、もつとも頻繁に、なんの抵抗もなく魔法を使つて騒動を引き起こすのは、サリーの弟分として登場するカブと、話の後段で登場する妹分のポロンである。サリーは「いたずらで魔法を使つてはいけない」（第46話）と叱り、カブもまた「人間の国ではできるだけ魔法はつかわないようにしている」（第41話）というものの、使用しなければ他のアニメとの差別化はできない。年少のカブとポロンは「いたずら」として魔法を使うことを強いられている。

番組にはサリーの友人であるよし子の弟である三つ子が登場する。三つ子の息の合ったいたずらや攻撃に対抗するために、カブは魔法を頻発する。いたずらが大好きな三つ子との遊びとも喧嘩ともつかないシーンは、間違いなく子どもには面白い場面と映ったにちがいない。

第三の魔法は、人間を救済するためであったり、あるいは悪者を懲らしめるために用いられる魔法である。積極的な魔法の発動が望まれる。こうした際の魔法の発動者は、もっぱらサリーであるが、サリーの手に余るような場合には、父親（国王）や母親、さては祖父（大魔法）までが登場する。

全109話の中に、泥棒や銀行強盗、誘拐犯が登場する話が少なくない。悪者を退治するためには容赦なく使用される魔法であるが、一度に決定的なダメージを与えたり捕獲をするための類いのものではない。楽器の弦で弓矢を放つなどオモチャで泥棒を攻撃する、階段を回転させて泥棒を2階に上らせないようにする、泥棒の靴にローラースケートを付ける、煙突から外ではなく部屋に移動させる、など、最終的には捕まえることになるが、魔法自体は遊びに近いものである。

「魔法」の矮小化・無力化

サリーが同情したり気の毒だと感じた事柄には、積極的に魔法を使う。母親のいない三つ子に同情してケーキを出す、父親が病気でク

リスマスを祝ってもらえないという女の子のためにクリスマスツリー、ケーキ、プレゼントを魔法を使って出し、雪まで降らせる。車に引かれそうになった三つ子のために時間を止めて助ける、時間を元に戻してなくなった切手を探すなど、お節介なくらいに魔法を使う。父親の魔王からは「人間を幸福にする魔法ならいい」(第73話)ともいわれている。

サリーは人間の世界に興味を持ってやってきたのであって、人間の世界を変えるためではない。心優しいサリーは、真珠の養殖が赤潮で大打撃を受けると知れば魔法で赤潮を吹き飛ばそうとし、友だちの祖父が念願にしていた七色の真珠の養殖を魔法によって叶える。少し考えてみれば、こうした魔法の使い方が、人間にとつて望ましいかどうかは疑問であるだろう。打算のない心優しいサリーが人のために用いる魔法は、視聴者にも快く映るに違いない。しかしながら、こうした魔法の使い方は、「魔法」そのものとしてみた場合、きわめて異質である。

番組の中で、魔法は雑事を片付けてくれるきわめて便利なものとして印象づけられるが、必ずしも絶対的なものとしては描かれているわけではない。魔法は相対化され矮小化されている。

使役されない領域の魔法が存在する。ひとつは治病に関する魔法である。サリーは人を助けるために、あるいは帳尻を合わせるためにかなり大がかりで突飛な魔法を使うことがある。たとえば、線路内に残された人が曳かれるのを防ぐために、衆人環視の中、電車を空中に持ち上げるとか、車に曳かれそうになった子どもを助けるために時間を停止する、ポロンが悪戯で小さくした電車を、テレビ中継で車庫が移っているにもかかわらず元の大きさに戻すなどである。⁽³⁸⁾ところが、病気に關しては基本的には治療を行わない、できない、という態度を取る。娘の結婚式を楽しむにしている盲目の父親の目が見えるようにできない。サリーは「無理だわ」と話す(第94話)。

第8話で友だちのすみれが足を怪我する。サリーは治すことなく、カブを医者に変けさせ湿布を貼らせる(治る)という面倒な手段をとる。トラックにはねられた友人のよし子の怪我を治すことができない(第13話)。親友のよし子の父親が病気になる生活が苦しくなるが、父親の病気を治さない(第42話)。クラスメートの美津子の父親が病気で生活に困るが、サリーは治さずに他の方法を探る(第42話)。転校生のポニーの心臓病は治せない(第60話)。番長に痛み付けられたクラスメートの傷は治さない(第67話)。サメに噛まれて瀕死の重傷を負った三つ子の一人カン太を助けるために、サリーは薬を持って嵐の海に小舟でこぎ出す(第87話)。

第28話「夢のバレリーナ」では、ちょっと複雑な経緯をたどる。知り合いのバレリーナが交通事故で足を骨折する。白鳥の湖を踊るこ

とを夢見ていたバレリーナに同情したサリーは、すぐに治そうとするが、父親に止められる。結局、3時間しか効かない、という条件づきで治すことを認めてもらうが、最終的には「サリーの親友ならしかたがない」という父親の一言で父親が病気を治す。

アメリカンスクールのメリーの風邪を治さない（第63話）。真心を込めて看病することが大事と母親に言われるが、結局、魔法の薬がひとつあったという父親の手助けで病気は快癒する。

魔法で他人の身体を治してやると自分のその部分が悪くなることがある、と父親から言われる。近視のクラスメートが眼鏡をかけたくないために悩んでいるのを見て、サリーは治そうとする。結局は、眼鏡をかけても男性生徒にからかわれない（からかわれても大丈夫）ということまで話は終わる（第82話）。地下鉄に乗ることを楽しみにしていた病気の子どもを魔法で慰撫するが最終的に子どもは亡くなる（第15話³⁶）。

もともと「人間世界では魔法は使えない（使ってはならない）」が原則ではあるが、最終的に魔法を使うことで問題が解決する（物語がハッピーエンドを迎える）ことが少なくない。番組の目的からいってもサリーが魔法を使うことは求められている。他方で、魔法はしばしば矮小化、無力化されて表現される。日常生活の出来事に関して、すべて魔法で解決という表現は明らかに望ましくない。とくに病気が魔法で簡単に治る、という表現は、放送上いくらアニメとはいえ慎まれたに違いない。

ポロンに「魔法がなくてもいい」といわせたり、カブに「魔法で作るより本物の方が美味しい」といわせるなど、現実社会に対する魔法の優越性は担保されていない。直接魔法が介在しなくても、地道に努力すること、話し合うこと、謝罪することの重要性はいたるところで強調されている。



第60話「ポニーの花園」では、魔法を使う場面はほとんどでてこない。カブがいたずらをして公園の噴水の噴き出したのに対して、サリーはその水を罰としてカブにかける場面だけであった。話は、クラスメートと仲良くするためのポニーの努力やクラスメートとの和解がテーマである。『少女と魔法』を記した須川亜紀子は、魔法少女サリーの分析に「ポニーの花園」を取り上げ、「少女の勤勉性と自己犠牲が、尊敬に値する行為として表象され、集団調和と相互理解をもたらす例³⁶」としているが、上述したように魔法は勤勉性にも自己犠牲にもまったく関係していな

い。³⁶

魔法が使用される場面のひとつとして「いたずら」を指摘したが、いたずらにおいても魔法の優位性が担保されているわけではない。カブはサリーの友人であるよし子の弟の三つ子と喧嘩を繰り返す。三つ子はきわめて旺盛に遊び、いたずらをする。三対一で対峙するカブは容赦なく魔法を用いるがそれでも勝てずにこてんぱんにされることが少なくない。ここでも魔法の力は絶対的なものでなく相対化され矮小化されている。

矛盾する魔法

いまひとつサリーが魔法使いとして位置付けられながらも使用することのない魔法の領域がある。それは預言である。治病行為（葉草の作成等）と予言（占い）は、魔法の重要な宗教的機能であるが、これらは基本的に排除されている。とくに予言には全く触れられていない。サリーが、危険を察知するとか、将来を占って行動を起こすといった場面は存在しない。ましてや「呪い」をやである。

そもそも魔法は当初から矛盾した存在だった。魔法の国から来たサリーは人間の世界で魔法を使うことを禁じられている。「人間が当然作るものを魔法で作ってはいけない」（第50話）と父親から釘を刺されているように、魔法は社会の改変にかかわるような使い方はできず、サリーの私的な領域にとどまっている。番組は魔法を使うことを想定して制作されているが、最終的に強調されるべきは努力、勤勉、友情といった魔法とはほど遠い、きわめて人間くさいものである。

こうした点からすると、番組がいかに前近代的で非科学的な魔法や魔法から遠いものだったかがよく理解できる。



サリーが住む魔法の国は、原作とは設定が明らかに異なっている。アニメ化に際して、わざわざ改変が加えられたことになる。マンガではサリーの住む国は「悪魔の世界」で暗く汚い異形の者が集まる場所である。父親は悪魔の世界の「帝王」である。とがった髪やコスチュームは、サタンを想起させるものである。アニメでは従来の魔法や魔法に繋がるイメージは払拭するか戯画化されている。サリーの住む魔法の国は地球から離れたどこか別の星として描かれており、冷たい感じはするもののお城のような建物である。父親は魔法の国の国王である。母親はロングドレスを着た栗色の髪（もしくは金髪）の女性として描かれていて、魔法を想起させるようなものではない。

魔法の国のヒエラルキーや世界観もきわめて不分明でご都合的である。サリーの父親は国王とされるが、神様や愛の女神も登場し、へ

りくだった態度でお願いをする。他にも、メフィスト、死に神、キュービッド、雨降りじいさんなど、少なからぬ神々が登場するが、その場しのぎの登場に終わっている。唯一継続的に登場するのは「ウルトラおばば」と呼ばれる伝統的な魔女に近い姿の老婆である。

ウルトラおばばは人間の世界でのサリーの家庭教師、見張り役としてしばしば登場する。黒ではないが灰色の先の曲がった帽子をかぶりかぎ鼻をしている⁽³⁷⁾。しかし「老婆」であって、毒リンゴの製造をサリーやカブにめちゃくちゃんにされたり、やたらに居眠りをするなど、危険なイメージは見せない。魔女が持つ反社会性や危険性は、「年老いた老婆」のワンテンポ遅れた動作によって解消され戯画化されている。



結局、こうしてみると、サリーやカブが用いる「魔法」について、製作者側にどの程度コンセンサスなり内規が作られていたかはわからなくなってくる。横山光輝が描いた原作は全7話（かわいい魔女」「パパよりも強い人」「ギョング騒動」「人間世界のおもちつき」「わんぱくちびっ子ども」「魔術師ジョー」「さよならサリー」）で、一話完結で109話からなるテレビ放送では、複数の脚本家が参加せざるをえなかった。制作をしながら数話先の脚本を用意するのが一般的であるとすれば、魔法や魔術に関する脚本家の関心や認知度にはブレが生じても不思議ではない。話によっては、ほとんど魔法が使われない放送回もあり、脚本家の意向が強く出たものとなっているように思える。

「魔法使いサリー」から「ひみつのアッコちゃん」へ

本論は「変身」をテーマにして、魔法少女、魔じよっ娘（子）を扱い、このジャンルの嚆矢として「魔法使いサリー」を取り上げた。しかしながら、サリーは、基本的に、変身することをしない。要するに、他の物になろうとしないのである。

サリーが全109話の中で「変身」するのは二度だけである。一度は、担任の山辺先生がホテルで見合いをするというので、友だちと見に出かけた際に、小学生は入れないと断られ、サリーがドレス姿の「大人」に変身した（第33話）。しかし、友人のよし子とすみれは、背も急速に高くなつたにもかかわらず、それがサリーであることを承知しており、サリーも友人に「私が見てくる」と言って入場する。それゆえに、これは変身というよりは変装に近い。今一度は、女神に化けて友人を励ます場面である（第32話）。

魔法少女で「変身」がテーマになるのは、東映アニメーションが魔法少女シリーズ第二作として制作した「ひみつのアッコちゃん」か

らである。魔法使いサリーの最終回で、後継の番組として「不思議のアッコちゃん」が紹介された。一般的な「次週からは〇〇」という告知ではなく、最終回が終わった後に、サリーが登場して自らお礼を言い、「すごくチャージングでお茶目な女の子、その名はアッコちゃん」と紹介し、アッコちゃんの「よろしく」という挨拶について次回の放送内容が流された。「魔法使いサリー」の成功と東映動画による魔女っこ子シリーズの継続を強く表すものであった。

「ひみつのアッコちゃん」は、小学生の加賀美あつ子が鏡の精からもらった魔法のコンパクトを用いてさまざまな人物に変身して騒動を解決していく物語である。1969年1月6日から1970年10月26日まで全94話放送された。

先に「魔法使いサリー」が「奥さまは魔女」の強い影響を受けて企画されたことを指摘したが、アメリカでの「奥さまは魔女」制作は企画の段階で強い反対にあった。放送が予定されていたアメリカの三大ネットワークのひとつであるABCの幹部たちは「こぞってドラマの「魔法」や「オカルト」といった超自然的部分に難色を示した⁽³⁸⁾」。

ABCの社長（当時）トム・ムーアは、このドラマにどうしてもついて回る、魔女や魔法が引がかかっていました。とくにアメリカ中西部および南部地域の、通称「バイブル・ベルト」（キリスト教信仰に篤い、保守的な地域）の試聴者から、多くの苦情がでるのではないかと心配したのです⁽³⁹⁾。

ABC幹部の心配は杞憂に終わったが、ダーリン役を演じたディック・ヨークはラジオ番組の中で、リスナーから電話で「『奥さまは魔女』は神を冒とくするドラマであり、自分の子どもには決して見せない」といわれた⁽⁴⁰⁾という。

日本にはこうした心配や一部の反発が生じるキリスト教的文化的背景は存在しない。魔女とは、悪魔と契約して特別な力を持ち、自然を操ったり、疫病を広める、毒薬を調合する、人間に害をなす者であるという文化的な常識は「ひみつのアッコちゃん」ではさらに一掃される。

サリーとアッコについて、その出自からサリーを「正統魔女」、アッコを「世俗魔女」とする表現が見られる。出自による分類も、実際に「魔法少女」の本質や意味にはあまり有意味ではない。後段の主要キャラクターの一人であるポロンは、元来は人間の子供で、捨



獲得かの境界は明確ではない。

ひみつのアッコちゃんも、鏡の精から不思議な鏡を受け取った、数少ない少女である。ひみつのアッコちゃん以降、多様なタイプの魔法少女がテレビというメディアに登場する。稿を改めて考察することにした。

注

- (1) 田中東子「コスプレという文化」成実弘至編『コスプレする社会』せりか書房、平成21年、25頁
- (2) 小泉恭子「異性を装う少女たち」井上貴子他編『ヴィジュアル系の時代』青弓社、平成25年
- (3) たとえば、「不思議な国の女の子たち 変身願望、「かつら」でいこうヨ！」毎日新聞、平成8年4月16日（東京夕刊）、「私もノリカや菜々子に 髪型・メイク、有名プロの手で変身願望かなえます」読売新聞、平成11年10月5日（東京夕刊）
- (4) 吉江真美「渋谷のヤマンパーその誕生と展開」倉石忠彦編著『渋谷学叢書1 渋谷をくらす』（雄山閣、平成22年）、石井研士『渋谷学』（弘文堂、平成27年）参照。
- (5) 石井研士『渋谷学』弘文堂、平成29年、62～73頁
- (6) 『平成24年度 メディア芸術情報拠点・コンソーシアム拠点事業 日本アニメーションガイド ロボットアニメ編』森ビル株式会社、平成25年3月、42頁
- (7) 『日本のアニメ全史』（山口康男編著、テンブックス、平成16年）では「魔法使いサリー」の登場によって「美少女Ⅱ魔法使いの概念が生まれる」（同、128頁）と記されている。研究者も同様で、須川亜紀子は巻末に伏した付録「おもな女の子向け「魔法少女」テレビアニメ」の最初に魔法使いサリーを挙げている（須川亜紀子『少女と魔法－ガールヒーローはいかに受容されたのか』N T T出版、平成25年、280～281頁）。登丸あすかも須川の研究を踏襲して、魔法使いサリーを最初としている（登丸あすか『アニメ番組が提示する魔法少女像』加藤佐和子他編『マンガ・アニメにみる日本文化』文京学院大学総合研究所、平成28年、

217頁)。およそ、アニメの通史、「魔法少女」を扱った著作論文は、ほとんどが同様の判断をしている

(8) 須川亜紀子『少女と魔法ーガールヒーローはいかに受容されたのか』NTT出版、平成25年、2頁

(9) 登丸あすか「アニメ番組が提示する魔法少女像」加藤佐和子他編『マンガ・アニメにみる日本文化』文京学院大学総合研究所、平成28年

(10) 「chapter6 ロボットと美少女はANIMEの2大潮流となった」『別冊宝島638 日本のアニメ』平成15年、宝島社、128頁

(11) 小山昌宏・須川亜紀子編著『アニメ研究入門』、現代書館、平成25年) には「第一章 文学理論 アニメ研究における批評理論の可能性」が掲載されている。筆者の中垣恒太郎は文学批評理論を参照にしてアニメ作品を分析する実践例を提示するとして、ジャンル批評にも言及している。中垣が具体的に扱っているのはSFであるが、SFというジャンルそのものの枠組みの考察ではない。文学理論におけるジャンルについては、ノースロップ・フライ『批評の解剖』(海老根宏他訳、法政大学出版局、昭和55年) 参照

(12) トドロフは、テキスト中で語られる奇怪な出来事に対し、合理的な説明をとるべきか、超自然的な説明をとるべきか、読者に「ためらい」を強いることこそが幻想文学の第一条件だとする。

(13) 「chapter6 ロボットと美少女はANIMEの2大潮流となった」『別冊宝島638 日本のアニメ』平成15年、宝島社、128-129頁

(14) 同、136-137頁

(15) 須川亜紀子『少女と魔法ーガールヒーローはいかに受容されたのか』NTT出版、平成25年、2頁

(16) 黒魔術を駆使する美少女・黒井ミサを主人公とするマンガで、『週刊少年チャンピオン』(秋田書店)に昭和50年から54年まで連載された。複数の映画、テレビドラマも制作された

(17) 平成17年から現在まで断続的に放送されているマンガ・アニメ。地獄少女・閻魔あいが晴らせぬ恨みを代わって晴らす物語

(18) 伊藤潤二によるホラーマンガで昭和62年より複数の雑誌に掲載。主人公の富江は絶世の美女であるが殺しても死なない。映画・ドラマ化もされている

(19) 横山光輝「あとがき」『原作完全版 魔法使いサリー』講談社、平成18年、346頁

(20) 「ニッポン人脈記 いつもアニメが…5 魔法っ子だって悩んでいる」朝日新聞(夕)、平成22年3月25日

(21) 同。制作会社である東映アニメーションの紹介頁にも、「アメリカのTVシリーズ「奥様は魔法女」のヒットがきっかけとなって企画された」(<http://www.toei-anim.co.jp/lineup/tv/sally/>)と記されている。アニメ化される経緯については、当時東映からNET(現・テレビ朝日)に出向し東映テレビ部が企画し

た子ども向け活劇を担当していた宮崎慎一の回想がある（『魔法使いサリー』プロデューサー宮崎慎一インタビュー』（『横山光輝プレミアム・マガジン Vol.6』講談社、平成21年、14～15頁）

- (22) 「巻頭特集『奥さまは魔女』『キネマ旬報』No.88、30・37頁、平成17年）『キネマ旬報』の「海外TVドラマ ベスト・テン」では第6位にランクインさせている。（36頁）

- (23) ハービー・ピラト『奥さまは魔女』よ永遠に』ワニマガジン社、平成10年、18～20頁

- (24) 『魔法使いサリー』プロデューサー宮崎慎一インタビュー』『横山光輝プレミアム・マガジンVol.6』講談社、平成21年、15頁

- (25) 第15話「北極のサンタクロース/A Visions Of Sugar Plums」で、クリスマスと一緒に過すことになった孤児に、サンタクロールはいないといわれて、自分分は魔女で北極にサンタクロールがいると説明するために、黒いマントを羽織ったことがある。さらに子どもの求めに応じて黒い帽子と箒を取り出した

- (26) 横山光輝「あとがき」『原作完全版 魔法使いサリー』講談社、平成18年、344頁

- (27) 『魔法のつえ』株式会社復刊ドットコム、平成25年、177頁

- (28) 須川亜紀子「少女と魔法ーガールヒーローはいかに受容されたのか」NTT出版、平成25年、80頁

- (29) 「少年サンデー」に昭和39年6号から昭和41年51号まで掲載された

- (30) 『日本TVアニメーション大全』世界文化社、平成26年、53頁

- (31) サリーはオープニングでこそ魔法の発動に杖を使うが、本編ではまったくといっていいほど使われる場面はない。最終回でサリーは、火事で燃える校舎を先生や友だちの前で、魔法と使って雨を降らせ消化するが、そのときにも杖は使われていない

- (32) 第1話「かわいい魔女がやってきた」、第5話「誘拐団は大あわて」、第7話「こんにちは泥棒さん」、第15話「魔法の地下鉄0号線」、第19話「おてんばドライプ」、第24話「謎の幽霊船」、第40話「かぎっ子太郎」、第92話「秘密の宝もの」

- (33) こうした場合、周囲の人間はサリー達が魔法使いであることを認識するか、何か特別な力が働いていることを知ることになるが、そうした点はなかったことになる

- (34) 治療の成功事例もあるが、相手は人間ではなく熊である。親熊が怪我を負っているときに治病をする。実際には大きな絆創膏が怪我をしている状況を表している、その絆創膏がとれることで治ったとする

(35) 須川重紀子『少女と魔法ーガールヒーローはいかに受容されたのか』NTT出版、平成25年、90頁

(36) 転校してきたハーフのポニーは、クラスに溶け込もうと日本についての勉強を熱心に行う。そのことがクラスメートの反感を買う。ポニーは日本の花として菊の花壇を作ろうとするが、いじめっ子にめちゃくちゃにされる。それでもポニーは花壇を作り続けるが雨の中での作業がたたって病気になる。ポニーがもともと心臓の悪いこともわかっていじめっ子も反省し、ポニーが登校できるようになった日には花壇に立派な菊の花が咲いている。第87話「愛のつばさ」では、親友のよし子の瀕死の弟のために薬を持って小舟で荒海にこぎ出していくサリーが描かれている

(37) カラー版になったオープニングでサリーがかぶる帽子は、黒ではなく緑色である。あえて魔法使いとしての暗い側面を否定するような設定を施しているように見える

(38) ハービー・「ピラト」『奥さまは魔女』よ、永遠に』庄野勢津子他訳、ワニマガジン社、平成10年、37頁

(39) 同、37頁

(40) 同、39頁